



山本雅基

やまもと まさき
「きぼうのいえ」代表

9

「あなたは 愛されているんだ」

「きぼうのいえ」の試み

「きぼうのいえ」は東京都台東区の一郭、通称「山谷^{さんや}」にあります。かつて山谷は日雇い労働者の街でしたが、現在は高齢化が進み、その平均年齢は六十四歳。簡易旅館が立ち並び、そこに約三五〇〇人の単身男性が生活保護を受けながら住んでいます。

その山谷の中心に、二〇〇二年の十月、「きぼうのいえ」が誕生しました。鉄筋四階建て。身寄りがなく、行き場をなくした方々の集合住宅で、ホスピスケアが行われています。入居者は全員が単身者で天涯孤独の境遇の方ばかり。末期がんやHIV、重い糖尿病や、腎不全（人工透析）、脳梗塞^{こうそく}の後遺症などを抱える二一一名が生活しており、六人の常勤スタッフと七名の非常勤スタッフ、その他約二〇名のボランティアが来訪してその生活を共にしています。また定期的に訪問診療や訪問看護が入り、介護ヘルパーが訪れては、それぞれの専門性や職能を生かし、スタッフだけでは担えない入居者の生活を支えます。

私たちは入居者のいわば家族として寄り添いながら、看取りを行っています。開設以来の四年間で、四二人の方々を見送ってきました。

その方々との思い出は尽きぬものがありますが、その中でも最初に看取ったHさんは忘れることができません。私たちはHさんの看取りをきちんとしたいと思い、ひとときも目を離さないようにと緊張していました。いよいよHさんが昏睡^{こんすい}状態に入り、長期にわたる看護で私たちも疲労^{こんぱい}困憊^{こんぱい}していたとき、主治医の川越厚先生から一本の電話が入りました。Hさんの状態を詳しく説明し終えたとき、先生から意外なひとことをいただきました。

「あのね、血圧は測るから気になるんだよ」「そっとしておいてあげなさい、看取りを難しく考えないで。おうちで家族と暮らしているお年寄りが、ある朝『おばあちゃん、ご飯だよ』って呼びにいったら冷たくなっていた。そうしたら

静かに手を合わせればいいんです。それが幸せな死です。むかしからみな、そうして人間は自然に死んできたんだから」

川越医師のことは、私たちは目から鱗うろこの落ちる思いをしました。それと同時にバリバリに固まっていた肩の力がすうっと抜けていくのを感じました。それから数日後の夜明け前、私たちは彼の最期を知りました。私たちが部屋を離れている数時間の間に彼は逝ったのでした。Hさんの目は薄く見開かれ、手はしっかりと祈るように胸で組み合わさっていました。「ひとりで逝きたかったんだね」。私たちは声を合わせるように言いました。それがHさんを囲んだ静かなひとときでした。

さて、「きぼうのいえ」での看取りの象徴的なものに「ミュージック・サナトロジー（音楽による看取り）」があります。これはハーブと歌声により死に瀕ひんした人の精神的、肉体的な苦痛を音楽で慰め、安らかにあの世に送り届けようとする試みで、愛と安らぎに満ちた音楽による、死に逝く人への緩和ケアです。

その目的は死に逝く人、死に遺のこされる人たちを、感情的、身体的、霊的な苦痛から解放することです。死に瀕した入居者の身体的、精神的、霊的な状態を感じ取りながら、愛と注意深いケアの姿勢で演奏されます。この緩和ケアは大きな効果が実証されており、今日のアメリカでは多くの医療者がこのプログラムを歓迎し、治療計画に取り入れているそうです。

「きぼうのいえ」の入居者はその特殊な生活歴から、多くの辛酸を舐なめてきた人が少なくありません。それゆえに、誠実な愛を求める飢え渴かわきには強いものがあります。人間は人生の最後に求めているのです。「私を大事にしてほしい。私を尊厳ある者として見てほしい。愛されていると感じたい。自分を惜しんで見送ってほしい」と。

「あなたは愛されているんだ」と感じていただくためにだけ、このセッションは行われており、そのスピリットはまさに「きぼうのいえ」がめざすケアの中心と言ってよいでしょう。

Ω



.....

ホスピスケアの大きな課題に、がん以外で死に逝く方へのケアと、グループホームでの看取りがあります。「きぼうのいえ」の山本さんご夫妻は、山谷という場所でのその困難な問題に真正面から立ち向かっています。私たちバリアンの力が少しでも役に立てばと願いつつ、見守っています。

(川越 厚すく バリアン代表)